英語演習 English as a Global Language

 担当　武藤

South Africa :( p43~p46)

オランダの植民地開拓者は早くも1652年にはケープに到着していたが、その地域でのイギリスの植民地開拓者はナポレオン戦争中の1795年、遠征への勢いが広がっていた時にさかのぼるだけである。イギリスの支配は1806年に確立され、入植地での政策は1820年に本格的に始まり、そしてその時約5000人のイギリス人がケープ東部に土地を与えられた。英語は1822年にその地域の公用語とされ、そこには多数のアフリカーンス語話者人口を英語化する企みがあった。英語は法律や教育、また他の公的生活のほとんどの側面の言語となった。1840年代と50年代にはさらなるイギリス人開拓者が特にNatalにやってきて、1870年代には金とWitwatersrandのダイアモンド域の開発に伴って大規模なヨーロッパ人の流入があった。多くが英語話者である50万人近い入植者たちは、その国に19世紀の末(1845~1900)の間に到着した。

その地域の英語歴史は、このように多くのふさを持つ。第一に、イギリス人開拓移民の異なったグループの間で、ケープではロンドン地域の方言が目立ち、Natalでは内陸部と北部の方言が強く表れるなど、ある程度の地域の方言変化があった：しかしついにはより同質の訛りが現れた―オーストラリアの訛りと多くの類似点を共有し、そしてまたこの期間に定着した訛りが。

同時に、英語はアフリカーンス語話者によって第二言語として使用され、また多くのオランダ人開拓者がこの多様性を、イギリスの支配から逃れて北へ移住するにつれて1836年のGreat Trekで採用した。いろいろなアフリカの英語の種類もまた、主にミッションスクールで言語を学んだ黒人人口によって発展し、話者の様々な言語背景によって異なる方法で影響を受けた。加えて、英語は民族的に混合した背景(混血)を持つアフリカーンス語や他の言語と一緒にたびたび使用されるようになった；そして1860年ごろからその国につれてこられた多くのインドからの移住者にもまた、採用された。

英語は南アフリカでは常に少数派言語であったし、現在も第一言語としては2002年の4350万人を超える人口のうち約370万人にしか話されていない。1925年に公的地位を与えられたアフリカーンス語は権力者のほとんどを含む白人の大部分の人々の第一言語であり、南アフリカ生まれの白人の背景のアイデンティティーの重要な象徴の役目を務めている。それはまた夕食人口の大部分の第一言語でもある。英語は(イギリスの背景を持つ)居残った白人と、ますます増加している(70%の多数派である)黒人によって使用されている。したがって言語の側面が、南アフリカのアパルトヘイト社会特有の政治の境界にある：アフリカーンス語は黒人の大部分に権威と抑制の言語だと思われるようになった；英語はオランダ系南アフリカ人政府に抗議と自己決定の言語だと思われるようになった。多くの黒人が英語を国際的な影響力(international voice)を達成するための、そして自分たちを他の黒人社会と結び付けるための手段だとみなしていた。

一方で、英語使用に関する現代の状況は他のどんな単純な反対者が示すよりも複雑である。白人権威者たちにとっても、英語は国際的なコミュニケーションの手段として重要であり、そして‘上昇志向のある’オランダ系南アフリカ人たちは、ますますイギリスを基にした種類に多く似た英語を流暢に話す二言語使用者となっている。近年世界中のテレビで見られるオランダ系南アフリカ人政治家の公式声明は、この能力を例証している。結果として、オランダ系南アフリカ人に強く影響された人々からイギリスの容認標準発音にとても近い人々にわたって、訛りの序所の変化は存在している。そのような複雑性は、社会的及び政治的地位が最優先の問題である国や、反対をものともせず国民的及び民族的アイデンティティーの深く持たれた感覚を維持しようと努力している国では避けられないことである。

1993年の憲法は、その国固有の言語の地位を高めようとする努力のもと、英語やアフリカーンス語を含む11言語を公式に命名した。そのような大がかりな多言語使用政策の影響はいまだにみられるが、11言語の決まったやり方を管理する難しさは計り知れず(p.89)、英語はおそらく重要なlingua francaであり続けるだろう。黒人の間では言語への情熱は育ち続けている：例えば1993年には、黒人の両親の間での政府の連続的な調査では、子供たちが教育で受けとるべき好ましい言語として、圧倒的に英語が選択されていることが明示された。そして1994年の南アフリカ議会では、その言語(英語)が進行を支配し続けており、すべてのスピーチの87％が英語によってなされている。

 South Asia (p46~p49)

　多数の英語話者によって、インド亜大陸は特に特有なポジションを占めており、おそらくアメリカとイギリスの話者の合計よりも勝るだろう。これは主に言語がインドで占めるようになった特殊な地位のせいであり、近年その推定は根本的な修正を受けている。伝統的な見方はどこかの3~5％の人々は通常英語を使用し、それはインドの人口が10億を超えた1999年ごろには約3千万から5千万の総計を算出した。その時から、推定は徐々に上がっていった―例えばある百科事典の総計では20%近くに達した。しかしいくつかの調査はより大きな合計を示しており、もし流暢さという融通の利く概念が許されるなら(p.68参照)、ある有力な再調査ではひょっとすると現在インドの3分の1の人々が英語で会話することができるのではないかと見積もっている。実質的には、これらの推定は3千万から3億3千万以上までの幅を示す(わかりやすく言うと、やや少ない値である2億は言語生産用－以下の図表1で使用した値である)。そして我々は相当な数の英語話者が他の5カ国(バングラディシュ、パキスタン、スリランカ、ネパール、ブータン)からなる地域のどこかほかの所にもいることを忘れてはならない。南アジアは世界で5番目に多い人口を抱えている。いくつかの英語の種類が亜大陸中に出現しており、それらは集合的に南アジア英語(South Asian English)として言及される。これらの種類は200年におよばないが、それらはすでに英語使用圏で最も独特な種類である。

　南アジアの英語の起源はイギリスにある。イギリスと亜大陸の最初の定期的な接触は東インド会社設－エリザベス女王によりその地域の交易の独占を認められたロンドンの商人らの集団―という形で1600年にあった。その会社は最初の交易支局を1612年にスラトに設立し、17世紀末までには他にもマドラスやボンベイ、カルカッタにも設立した。18世紀中に、それは他のヨーロッパの国―特にフランスとの競争に打ち勝った。Mughal帝の権威が低下するにつれてその会社の影響力は増し、1765年にはベンガルの歳入を上回った。その会社員の間での経済的無秩序の期間の後に、1784年にIndian Actがイギリス議会に対し責任を負うBoard of Controlを確立し、インドの反乱の後の1858年には、その会社は廃止されその権力は女王に委譲された。

　イギリスの統治期間である1765年から独立する1947年までの間、英語は徐々に亜大陸中の政治と教育の手段となった。言語質問は、植民地経営者が一種の教育政策を導入するべきだと討論していた19世紀初めに特別な関心を引き付けた。世間に認められるターニングポイントは、1835年にトーマスマコーレーにより書かれたMinuteのウィリアムベンティック卿の受理で、それは英語教育システムのインドへの導入を提案していた。ボンベイやカルカッタ、マドラス大学が1857年に設立されたとき、英語は教育の初歩的な手段となり、それによりその地位と安定した成長が次世紀の間保障された。

　インドでは、英語、ヒンディー語支持者と地域言語支持者の間での激しい闘争が1960年代に‘3言語フォーミュラ’に結びつき、英語は地方言語の代表的代替言語として導入された(主としてヒンディー語は北部、地域言語は南部)。それは今、ヒンディー語が公用語であるとともに‘連合した’公用語の地位を保持している。それはまた4カ国 (マニプール、メガラヤ、ナガランド、トリプラ) と8つのユニオン領域で公用語として認識されている。

　英語は、その結果、その地位をインド社会で保持しており、法制度、政府行政、二次及び高等教育、軍隊、マスメディア、ビジネス、そして観光の中で使用され続けている。それは強力に一体化した強制力である。南のドラビダ語話者地域では、ヒンディー語が共通語(lingua franca)として好まれている。北では、その資産は国ごとに異なっているが、ヒンディー語に関して言えば、権力者の政策に依存している。パキスタンでは、それは関連した公用語である。南アジアのどの国でもそれは公的地位を持っていないが、その地域中で国際的コミュニケーション手段として到る所で使用されている。それはますます若い南アジア人らに文化的現代性を持つ言語として受け入れられている。

　 Former colonial Africa (p49~p54)

 数世紀にわたるヨーロッパ人とアフリカの国々との交易にかかわらず、18世紀の終わりにはケープのオランダ人だけが常設の居留地を確立した。けれども、1914年にはイギリス、フランス、ドイツ、ポルトガル、イタリア、そしてベルギーの側の植民地への野望により大陸全体(リベリアとエチオピアを除く)を植民地領土に分割する結果となった。二つの世界大戦後、ドイツ領とイタリア領の没収に伴い領域の再分割が行われた。この分割により作られた国々の大部分が1960年代やそれ以降に独立を果たし、アフリカの統一組織は既存の境界線の維持を誓った。

　英語は15世紀の終わり頃から西アフリカにもたらされ、そしてまもなく我々は沿岸開拓地で共通語(lingua franca)としての言語使用において散在する引用を発見した。19世紀初めには貿易と奴隷貿易反対運動の増進が英語を西アフリカ沿岸全体に広めた。数百の対処すべき地域言語で、その地域のある特定の特徴は、植民地当局者や宣教師、兵士、商人らの標準的な多様性に並行して使われたいくつかの英語ベースのピジン語とクレオール語の増加であった。

　イギリスの種類(variety)は特に現在そのすべてが英語に公的地位を与えている5カ国で発達した。その地域にはまたアメリカの影響も一つあった。

・Sierra Leone：1780年代、イギリスの慈善家が解放された奴隷のための居留地を設立するために土地を与え、イングランドからの最初のグループはノバスコシアとジャマイカに到着した。その居留地は1808年に直轄植民地となり、その活動で時折約六万人の再逮捕者を国にもたらした奴隷貿易反対団体の基地として使われた。意思伝達の主要な形式は英語ベースのクレオール語であるKrioで、これは急速に西アフリカ沿岸に広まった。内陸地域は1896年にイギリスの保護国だと宣言された；そしてその国は1961年に独立を回復した。人口は2002年までに540万人以上に増加し、そのほとんどがKrio語を使用できる。

・Ghana(前Gold Coast)：交易の利益を保護するために行われたイギリスのアシャンティへの成功的な遠征に伴い、1873年に南ゴールドコーストは保護国宣言を受けた。現在の国は1957年にこの植民地と隣接した英領トーゴランド信託統治領の連合により設立され、第一次世界大戦後はイギリスに委任統治されていた。ガーナは1957年に独立を達成した。人口は2002年には約1900万人に達し、約150万人が第二言語として英語を使用していた。

・Gambia：ガンビア川に沿ったイギリスの貿易は17世紀初頭に遡る。フランスとの争いの期間は反奴隷運動のための英国のベースとして、バサースト(現バンジュル)の成立により継続された。首都は1843年に保護領化され、国は1965年に連邦の独立したメンバーの一つとなり、1970年には共和国となった。2002年には人口140万人となった。Krioは共通語(lingua franca)として広く使われている。

・Nigeria：19世紀初頭のイギリスの内部探検の期間の後、1861年にはラゴスに英国植民地が設立された。これは1914年に統一国樹立のために他の南部領及び北部領と合併され、1960年に独立を回復した。アフリカにおける多言語使用国家の一つで、1990年代半ばには約500言語が確認されている。2002年の人口は1億2千6百万人を超えていた。その約半分がピジン又はクレオール英語を第二言語として使用している。

・Cameroon：ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、そしてイギリス人の調査により、この地域は1884年にドイツの保護国となり、1919年にフランスとイギリスにより分割された。若干の不確実性ののち、フランス語と英語の両方を公用語としたままその二つの地域は1972年に一国に合併した。そこは非常に多言語を使用する地域で、2002年の人口は1600万人近かった。したがって接触言語の活躍する国となり、特にカメルーンピジン語が、人口の約半分の人々により話されている。

・Liberia：アフリカのもっとも古い共和国は1822年にアメリカ植民地協会により設立され、それはもと奴隷たちの祖国を確立することを願っていた。50年のうちにそれは1万3千人の黒人のアメリカ人たちを受け入れ、6千人の奴隷たちと同様に海で捕まえられた。居留地は1847年に共和国となり、アメリカをベースとした構造を採用した。それは19世紀の‘アメリカの奪い合い’の間のヨーロッパからのプレッシャーにも負けず、何とか独立を守り通した。2002年の人口は約320万人、そのほとんどが第二言語としてピジン英語を使用する(が、また多くの第一言語話者も存在する)。アメリカの、アフリカ系アメリカ英語との関連はまだ非常に明確である。

　英国の船は16世紀の終わりから東アフリカに訪れていたが、組織的な興味はRichard Burton、David LivingstoneそしてJohn Spekeなどの英国探検家の内陸部への探検に伴って1850年代に入ってから始まった。帝国英領東アフリカ社は1888年に設立され、そのすぐあとに植民地保護領のシステムが確立された、その一方で、他のヨーロッパ各国(ドイツ、フランス、イタリア)は領土支配に関してイギリスと張り合っていた。

　いくつかの現代国家はそれぞれイギリスとの連合の歴史を持っているが、独立の際に英語に公的地位を与えており、そのためイギリス英語が、政府、法廷、学校、マスメディア、そして他の領域において広く使用されたことにより、これらの国々の発展の中で主要な役割を果たしていた。またその地域内のほかのところ、たとえばルワンダやエチオピア、ソマリアなどでも国際交流の手段として採用された。

・Botswana：1885年からイギリスの保護下に入り、国の南部は1895年にケープ植民地の一部、北部はベチュアナランドの一部となった。1966年に独立を果たした。2002年の人口は150万人。公用語は英語。

・Kenya：1920年からイギリスの植民地で、10年の不安(マウマウ団反乱)の後に1963年に独立した。英語はそのころ公用語となり、1974年にスワヒリ語が国家言語とされた。英語はそれでもやはり国において重要な役割を果たし続けており、2002年には3千百万の人々が使用している。

・Lesotho：バストランドとして1869年からイギリスの保護下にあり、1960年に独立した。2002年の人口は220万人近く。公用語は英語。

・Malawi(前Nyasaland)：1907年にイギリスの植民地となり、1964年に独立を回復した。2002年における人口は1050万人。英語はChewaとともに公用語。

・Namibia：1884年からドイツの保護国となり、1920年に国際連盟によって、南アフリカに委任統治されていた―そして後に(南西アフリカとして)それと併合された。国際連合は1966年に直接的な責任を取り、ナミビアとして知られるようになり、1990年に完全な独立を果たした。2002年の人口は180万　人。公用語は英語。

・Tanzania(前ZanzibarとTanganyika)：ザンジバルは1890年にイギリスの保護国となり、イギリスは1919年にタンガニーカの委任統治権を獲得した。東アフリカで最初に独立を獲得した国で(1961年)、2002年には人口が3千600万人を超えた。1967年まで英語はスワヒリ語とともに共通の公用語でありその後国家言語の地位を失った；しかし今だ重要なコミュニケーションツールである。

・Uganda：拝んだ王国は1893年から1903年にかけてイギリスの保護領に組み込まれ、1962年独立を回復した。2002年には人口が2400万人を超えた。英語は唯一の公用語だが、スワヒリ語も共通語として広く使用されている。

・Zambia(前Northern Rhodesia )：当初は英国東アフリカ社によって行政管理されていたが1924年にイギリスの保護領となり、1964年に独立を果たした。人口は2002年に1100万人を超えた。公用語は英語。

・Zimbabwe(前Southern Rhodesia)：ここもまた英国東アフリカ社により行政管理されていたが、1923年にイギリスの植民地になった。アフリカ規則のもとでの独立への反対は1965年の白人支配政府によって一方的独立宣言(UDI)へとつながった。政権は結局アフリカ人多数派へと移り、1980年に独立を回復した。2002年における人口はおよそ1100万人。公用語は英語。

　東アフリカで発展した英語の種類は西アフリカのそれとはまったく異なる。多くのイギリス人移住者がそのエリアに移り住み、国外追放者や環境的により適していない西アフリカ地域では決して出現しないアフリカ生まれの白人階級(農家、医者、大学講師など)を生み出した。英国モデルは早いうちに学校に取り入れられ、それは世紀の変わり目のころに多くの伝道グループによってもたらされたイギリス英語との接触を強化した。結果としてナイジェリアやガーナよりも南アフリカやオーストラリアでよく聞かれるものとこそ共通点のある様々な種類の母語英語が成立した。

　 South-east Asia and the South Pacific (p54~p59)

　南太平洋の西あるいは中にある領域ではアメリカ英語とイギリス英語の興味深い混合が起こっている。主要なアメリカの存在は1898年の米西戦争後に出現し、そのころからアメリカはグアム島(及びカリブ海のプエルトリコ)とフィリピンの統治権を手に入れた。ハワイもそのころ、アメリカの影響力が壮大していた期間の後に併合された。1940年代、アメリカによる日本に占拠された太平洋の島々への侵入が第二次世界大戦後に国連信託統治領としてアメリカの責任下におかれたいくつかの地域により続いた。フィリピンは1946年に独立したが、アメリカ英語の影響は強く残った。そしてこの国には非常に多くの英語話者がその地域の州にいたので(2002年では約8千万人)、世界総計に重大に貢献した。

　イギリスの影響はイギリス人航海士の航海、特に1770年代におけるキャプテンクックの航海を通じて18世紀の終わりに始まった。ロンドン宣教師協会は宣教師を50年遅れて南太平洋の島々に送った。南東アジアでは、イギリス植民地帝国がイギリス東インド会社総督のStamford Rafflesの成果により発展した。センターはいくつかの場所、特にペナン(1786年)、シンガポール(1819年)、マラッカ(1824年)におかれた。数か月のうちに、シンガポールの人口は5千人以上増加し、マレー連合国が直轄植民地として統合されたとき(1867年)には、英語はその地域を通じて法律と行政の手段として確立され、他の状況でもますます使われるようになっていった。有名な例は1845年に創刊された英語の日刊新聞『The Straits Times』である。

　英語は必然的に、そして急速に南東アジアのイギリス領で力をもった言語となった。香港島は1842年に大石地アヘン戦争の終わりに南京条約によってイギリスに割譲され、1860年にはクーローンが加えられた；植民地の大部分を占める新領域は、1898年から99年間にわたって中国から貸与された。19世紀の終わりに向けて、その地域のいくつかの領域がイギリスの保護領となったが、そのいくつかの行政はのちにオーストラリアやニュージーランドによってなされた。彼らの境遇の一部分として英語を持つ領域は、独立してキリバス、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦、北マリアナ諸島、サモア、トンガ、ツバル、そしてヴァヌアトゥとなった。

　イギリスの教育システムの導入は学習者を標準イギリス英語モデルにとても早くにさらした。イギリスの中等学校は(現在マレーシアの主要な港である)ペナンで1816年に始まり、イギリスからの上級教育者を日常的に用いていた。最初はこれらの学校に参加したのは人口のほんの少しの割合だけであったが、19世紀中のそのエリアへの中国人及びインド人移住者の殺到に伴いその数は増加した。英語は急速に専門的進歩の言語及び主要な記述言語となった。その世紀の変わり目の直後、英語を使った高等教育もまた導入された。そのため英語は英語教育を受けた人やそれによって専門社会に入った人の間で一流の共通語となった。

　その地域には共通の植民地歴史であるにもかかわらず、ただ一つの‘南東アジア英語’は出現しなかった。特に独立までのシンガポールとマレーシアの政治的歴史は、これが起こるにはあまりに異なっている；そして香港とパプアニューギニアの社会状況は独特である。

・Singapore：1950年代に、中国語、マレー語、そしてタミール語と並行して英語を統一手段として使用する2言語使用教育システムがシンガポールに導入された。けれども、英語は政府と法システムの言語であり続け、教育とマスメディアでの重要性も維持された。一般人口の間でその使用は着々と増加していた。1975年の調査では、40歳以上の人々の27％だけが英語を理解すると主張し、一方で15歳から20歳の間では87％以上が主張した。家庭でも使用がかなり広がっているという証拠があり、シングリッシュとして知られる新たな地域言語が発展した。2002年には、この国の人口は約430万人であった。

・Malaysia：続く独立(1957年)でBahasa Malaysiaを国家言語として採用したマレーシアでの状況はとても異なっており、英語の役割はそれに応じてより制限されるようになった。マレー中等教育が、国内的目的よりも国際的価値を重視して―第二言語というよりも外国語として、英語を強制科目として導入した。けれども、多くの話者にとって、英語に付属する伝統的名声はいまだ存在していた。2002年にはその国の人口は2千2百万人を超えていた。

・Hong Kong：この領域では英語はいつも制限されていた―政府または軍行政、法、ビジネス、そしてマスメディアに関連して。中国語(広東語)は人口(2002年で700万人以上)の98％以上の人々の母語である。けれども、近年教育対策において大きな増加がみられ、推定で人口の4分の1以上がある程度の英語能力を持っている。英語と中国語はともに社会的地位を保持しているが、よく大量の言語の混合を伴って、中国語がスピーチの場面で優位を占めている。英語の将来的な役割には、1997年の権力の移動に従って未確定な環境があり、言語使用のパターンは今までのところほとんど変化を見せていない。

・Papua New Guinea：早くも1793年にはイギリス人航海士はこの領域を訪れており、1884年にイギリスとドイツがそのエリアを併合した。イギリス領ニューギニアは1904年にオーストリアにパプア州として委譲された；ドイツ領ニューギニアは1921年にオーストリアに統治が委任された。二つのエリアは第二次関大戦後に併合され、1975年に独立した。2002年には5百万人近い人口があった。そのおよそ半分が英語をベースとしたピジン語の一つであるTok Pisinを第二言語として話す(そして中には母語として使う者もいる)。それは全国的存在であり、高校や出版物に多くみられ、ラジオやテレビで聞かれる。シェイクスピアや聖書を含む多くの主要な作品はTok Pisinに翻訳される。

　ところどころ訳や日本語がおかしい所があると思いますので、適宜直してください。